

ORIENTAL STUDIES TRIPOS Part I

Japanese Studies

---

Friday 30 May 2008      09.00 – 12.00

---

**J.5    CLASSICAL JAPANESE**

*Answer **both** sections and **all** questions*

*Write your number **not** your name on the cover sheet of **each** Section booklet.*

**STATIONERY REQUIREMENTS**

*20 Page Answer Book x 1*

*Rough Work Pad*

**You may not start to read the questions  
printed on the subsequent pages of this  
question paper until instructed that you may  
do so by the Invigilator.**

SECTION A

1 Translate the following passage into English, adding notes where you think they are needed. The Japanese headnotes are merely for your reference. [34 marks]

Mutō Yoshiuji is enraged and appoints one of his followers to lead the attack

の北岸の地域で、飽海郡一帯をいう。『庄内物語』は「仙乏山」とする。『庄内物語』に、「一説に仙乏山に七党とて土有、是を討亡んとて、義氏は東禅寺何某を大将にて、人数を出しけるによな坂といふ所迄出て、二五臣として従属した。二六分けて持つてゐる土地。分け与えられた領土。二七『奥羽水慶軍記』以下「軍記」と略し「東禅寺筑前守」として見え、暴政に反抗する領民を攻めに、後に義氏の家臣に殺される。『新編東国記』には「東禅寺右馬允」と見え、最上義光から尾浦(大山)の城を預かる事が見える。『庄内物語』には両説を挙げる。一六代々仕えてきた家臣。一九『庄内物語』に「信正云、今大山の城跡の北に、仙乏酒田等へ通る坂有、是を米坂と云。二〇動き。二一『太平記』に「広戸弾正左衛門」に「杉田弾正左衛門」「一ノ宮弾正左衛門」など見える。楠姓とこれを合させたもの。『軍記』卷三に「上方浪人五十棲れは六十郎トイフ軍者アリ。孫子・呉子・司馬法・三略ナドノ書ヲ読ムニ、山北武士ナド曾テ是ヲシラズ」とある人物などを合わせて創造したものか。

二三 若干計略に巧みなところがある。二五 囲碁の用語。先手を取る。ここは先に立って議事を進める事をいった。二六 名家。二七 「覚悟」のあて字。

隣郡川北といふ所に、七党とて頭立ちたる士七人あり。むかしは武藤家に膝を屈したれ共、近比は七党ともに、義氏の無道をうとみ、武藤家に付かず、七党心を一致にして、各我が分地を守りける。義氏常にこれを憤り、つひに是を討ち亡さんと、東禅寺右馬介といふ相伝の家来を大将として、軍勢をさしむけらる。此の比の七党皆器量ある勇士なれば、右馬介も軽々敷くよせられず、余奈坂といふ所まで軍勢を押し出だして、ここに陣をとりて、敵の動静をうかがひける。七党の徒これを知り、会合して防戦の計策を議す。此の七党の中に、楠弾正左衛門といふものあり。

二五 平生些しの謀略ありて、物に驚かぬ大丈夫なるが、此の評議の先をとつて、各にむかつていふやう、「義氏の武勇中々力を以て敵すべからず。しかれども大家にたてづく七党かかる事のあらんは、われにおいてつねに其の格悟あり。それがし些しの計をほどこし、心をつくして敵を防ぐべし。

Tsuga Teishō, Hanabusa sōshi, NKBZ edition, pp. 206-7

頭立ちたる	leading	うとむ	distance oneself from
討ち亡す	destroy	陣	camp
たてづく	oppose	それがし	you

## SECTION B

Candidates should answer **all** questions:

2 Translate the following passage into English [14 marks]

また、治承四年水無月の比、にはかに都遷り侍(り)き。いと思ひ  
 の外なりし事なり。おほかた、この京のはじめを聞ける事は、嗟  
 の天皇の御時、都と定まりにけるより後、すでに四百余歳を経たり。  
 ことなるゆゑなくて、たやすく改まるべくもあらねば、これを世の  
 人安からず憂へあへる、実にことわりにも過ぎたり。  
 されど、とかくいふかひなくて、帝より始め奉りて、大臣・公卿  
 みな悉く移ろひ給ひぬ。世に仕ふるほどの人、たれか一人ふるさと  
 に残りをらむ。官・位に思(ひ)をかけ、主君のかげを頼むほどの人  
 は、一日なりとも疾く移ろはむとはげみ、時を失ひ世に余されて期  
 する所なきものは、愁へながら止まり居り。軒を争ひし人のすまひ、  
 日を経つ、荒れゆく。家はこぼたれて淀河に浮び、地は目のまへに  
 鳥となる。人の心みな改まりて、たゞ馬・鞍をのみ重くす。牛・車  
 を用する人なし。西南海の領所を願ひて、東北の庄園を好まず。

Hōjōki, NKBT edition, pp. 26-27

3 Parse the phrase: 'Kotonaru yue nakute, tayasuku aratamarubeku mo araneba'  
[7 marks]

4 Put this passage into its historical context. [12 marks]

(TURN OVER)

## 5 Translate the following passage into English [20 marks]

はや、揚屋には、駭を見せて、手叩きでも返事せず、吸物の出時淋しく、「茶のも」といへば、両の手に天目二つ、帰りさまに油火の灯心をへして行く。女郎それ／＼に呼びたつる。さても／＼、替るは色宿のならひ、人の情は一步小判あるうちなり。皆川が身にしては、悲しく、ひとり跡に残り、泪に沈みければ、清十郎も、「口惜しき」とばかり、言葉も命は捨つるにきはめしが、この女の「同じ道に」といふべき事を悲しく、とやかく物思ふうちに、皆川、色を見すまし、「方様は、身を捨て給はん御気色、さりとは／＼おろかなり。我が身事もともに、と申したき事なれども、いかにしても世に名残あり。勤めはそれ／＼に替る心なれば、何事も昔々、これまで」と、立ち行く。

さりとは、思はく違ひ、清十郎も我を折つて、「いかに傾城なればとて、今までのよしみを捨て、浅ましき心底、かうはあるまじき事ぞ」と、泪をこぼし立ち出る所へ、皆川、白装束してかけ込み、清十郎にしがみつき、「死なずにいづくへ行き給ふぞ。さあ／＼今ぢや」と、剃刀一対出しける。清十郎、又さしあたり、「これは」と悦ぶ時、皆々出合ひ、両方へ引きわけ、皆川は親方の許へ連れ帰れば、清十郎は人々取りまきて、内への御詫言の種にもと、旦那寺の永興院へ送りどけける。

その年は十九、出家の望み哀れにこそ。

Ihara Saikaku, *Kōshoku gonin onna*, NKBT edition, pp. 311-12

## 6 EITHER Use this passage to illustrate some of the features of Saikaku's style OR set this text in its historical context. [13 marks]

END OF PAPER